



「おはよう」一人一人に声をかけます。「行ってきます」子どもたちからは元気な声が返ってきます。

人が自主的に参加しています。会員はそろいのジャンパーや腕章を着用し、ごみバサミなどの用具を持って、ごみを拾いながら、出会う子どもや出勤途中の人にあいさつをしているそうです。

この運動は、地域の人たちとのコミュニケーションだけでなく、ごみを拾う美化運動で地域がきれいになり、さらに地域がきれいになると泥棒が入りにくいという防犯面にも役立ち、一石三鳥であるといえます。

この運動を進めて感じたことは「この運動が町全体に広がりをもたせたことは、大変うれしいことであり、コミュニケーションとしてのあいさつ運動だけでなく、交通安全指導、防犯パトロールの視点を入れて展開した結果であると思う」と語ってくれました。

さらにこの運動が着実に進むように、あいさつパトロールボランティア募集のちらしを配布したり、運動中の写真を撮ったり、活動記録から状況分析を

**町全体にこの運動を
続けていくために**

今では、車に乗っている人たちもあいさつする人が多くなり、子どもたちのあいさつも必ず返ってくるようになったといいます。

子どもたちの名前も憶え、時には名前を呼び、手と手でタッチするあいさつなどでもして、子どもたちからは「行ってきます」「おはよう」「ただいま」などの元気な声が返ってくるということ。その明るい声を聞くたびに、元気をもらおうそうです。

まちづくり情報特派員特集
ふれあいの芽を育てる！
安全・安心・子育て



2009年の幕が開きました。少子高齢化、団塊世代の大量退職など刻々と変化する状況のなかで、町民との“協働”で、うるおいと生きがいのあるまちづくりが進んでいる開成町。新しい年のスタートにあたり、地域のふれあいと安全・安心、子育て世代のサポート、多感な時期の子どもたちの健全育成など、地域に根差して活動している事例を紹介します。

**あいさつ運動で
一石三鳥**

この人に話を伺いました！

「あいさつ運動パトロール隊」発足の第一人者

下山 千津子さん(上延沢)

**きっかけは
思いがけないところから**

平成15年から始めた上延沢自治会福祉部のあいさつ運動パトロール隊は、下山さんが、行きかう人が気軽に何気ない会話やあいさつを交わしている光景をテレビで見て、地域コミュニティづくりには「これだ」と瞬間的に思い、すぐに福祉部に提案。みんなの賛成があつてすぐに実行に移したそうです。

「人間関係の希薄化がみられる中、家庭、学校、地域のそれぞれの場で、社会生活の基本であるあいさつが、さわやかにされるようになって欲しい」「地域の子どもは地域で育てるという視点に立ち、日ごろから子どもに関心を持ち、声をかけることで、あいさつができる子どもを育てていきたい」「この運動により、地域の交流が深まるとともに、小・中学校の登下校時などの交通安全や防犯などにも効果を上げてほしい」と下山さんは提案をした



地域ですっかりおなじみのあいさつ運動パトロール隊の皆さん

して改善しているとのこと。会員が真剣に活動されている様子がうかがえます。

取材をして一言

「継続は力なり」といわれているように、下山さんはじめ、会員皆さんの活動に対する熱い意気込みが感じられ、心から「ありがとうございます」が返ってきます。ご苦労様です」と労をねぎらいたいと感じました。

当時の熱い思いを語ってくれました。

この運動は、平成16年にNHKテレビの「難問解決！近所の底力」でも紹介されました。また、今でも地元ケーブルテレビで紹介されたり、足柄上地域安全・安心まちづくりフォーラムで発表したり、近隣の市町からも視察を受け、注目されています。



あいさつ運動への熱い思いを語ってくれた下山さん

**子どもたちの明るい声で
元気をもらおう**

活動は、毎月、登校時刻の朝2回、下校時刻の2回、夜2回の計6回実施。会員数は約100人、毎回20人程度の

**子ども・学校・地域に
かわりをもとう！**

この人に話を伺いました！

「文命中学校 おやじの会」平成20年度会長

田中 栄之さん(下島)

近所のカミナリ親父の必要性

文命中学校におやじの会が発足したのは、平成9年。少々学校が荒れていた時期でもあり、「こんな時こそ、近所のカミナリ親父が必要だ」と、生徒の父親有志が立ち上がり、夜間のパトロールなどを中心とした活動を開始したのが会のはじまりだったといえます。

それから12年。現在、卒業生の父親も含めて30人ほどのメンバーで活動が続けられています。おやじがメンバーのこの会は、それぞれの職業や技能を生かした活動も少なくないそうです。

「地域のおやじ」として

現在の主な活動は、年5〜6回のパトロール、親子のスポーツレクリエーション、メンバーの特技を生かして「学校に何かを残そう」といった取り組み